

## 『歴史に挑む教会』

2015年01月13日

依田駿作牧師が急逝されて10年になる。奥様の康子牧師が、書き残されたものを編集して『歴史に挑む教会』と題して遺稿集を出された。依田牧師の姿と誠実な語り口を思い出しながら、感銘深く読んだ。第1部は「使徒行伝による説教」、第2部は「説教」、第3部は「論文」の三部構成にまとめられている。

「使徒行伝」は新共同訳では「使徒言行録」に変わった。使徒言行録は28章からなる大部の書簡である。依田牧師は、それを22回の説教にして、キリスト教の月刊誌『福音と世界』に連載された。十字架の死から復活されたナザレのイエスを「主」と告白する者は、神によって起こされる（復活させられる）。ペトロ、パウロは神によって起こされ、自立した主体的な歩み（伝道）をしている。そして、その伝道は虚構に満ちた世界に真理を打ち立てる、歴史に挑む教会の闘いであった。3章の、足の不自由な男が、主イエスの名によって歩いた奇跡を「立脚点」、21章の、パウロの命を賭してのエルサレム帰還を「真理選択」と題して書いている。依田牧師らしい説教題をつけ、主イエスによって立脚点を与えられ、福音の真理を生きよと説教している。

第2部、第3部では、ご自分の神学形成と日本基督教団論を書いている。依田牧師は中学1年生の時に洗礼を受け、鈴木正久牧師に勧められて神学校に行き、牧師になられた。当初、罪の告白は自分が神の前で「十字架につけよ」と言った張本人であると懺悔することであると思込んでいた。D・ボンフェッファの『現代キリスト教倫理』を通し「教会の罪」を懺悔するという言葉に接し「教会の責任」に目覚めた。説教で一人ひとりの魂を問題にするだけでなく、教会はこの世に対して責任を負っていると考えようになった。1967年に、教団議長・鈴木正久の名前で、所謂「戦争責任告白」が出された。この「戦争責任告白」で、教会が日本において「言葉」を獲得したと思った。パウロの「わが身を叩いて服従させる」という言葉のように、教団は自らの罪を懺悔するところで、はじめて「言葉」を発することができる。「戦争責任告白」を堅持していく決意をし、その道を歩まれた。70年代、万国博覧会に「キリスト教館」の出展を巡り、青年たちから問題提起され、教団内で大きな紛争が起こった。依田牧師は紛争の中で苦勞をされた。

「即位の礼・大嘗祭違憲神奈川住民訴訟（バンザイ訴訟）」の原告代表として、1992年から2005年まで14年間、奮闘された。私も原告の一人として、しんがりに連なった。最高裁まで行き敗訴したが、天皇制を問う、まさに歴史に挑む裁判であったと思う。また、依田牧師は「日本基督教団信仰告白（以下—教団告白）」を厳しく問うている。

教団は1941年、宗教団体法の下で、プロテスタント諸教会が合同して誕生した。緊急に合同したため、教会で大切な「信仰告白」を生み出す余裕はなく「教義の大要」を作って合同した。この時の「信徒綱領」はキリスト教の教義や礼拝や聖餐よりも先に「皇国の道に従い、皇運を扶翼すべし」と勧めている。天皇制に飲み込まれた中での「教義の大要」が、ほぼそのまま「教団告白」になっている。雨宮栄一先生が1981年に出された『日本キリスト教団教会論』で、そのことを指摘している。1998年に『日本基督教団史資料集』が出版され、資料を見て、私は愕然とした。また「教団告白」は1954年に、教団からの離脱を防ぐ政治的な意図を持って作られた。「教団告白」はそれなりの使命を果たしてきたが、依田牧師が批判するのは当然である。歴史に挑む教会として、生きた言葉を持つ新たな「教団告白」を生み出す必要がある。